《研究報告》

メタ倫理学における価値の実在問題について：

準実在論と感受性理論

本研究報告は、京都大学倫理学研究室在籍の大学院生を中心に2001年の秋ごろからおこなわれてきた研究会での発表を土台としています。この研究会は、*Moral Discourse & Practice*[1]をメイン・テキストとして、20世紀英米圏のメタ倫理学における諸問題についての相互理解を深めることを目的としています。昨年度の『実践哲学研究』(第25号)ではその活動報告として「道徳と行為の理由」をテーマとし、内在主義(internalism)と外在主義(externalism)という対立する立場の紹介を行いました[2]。本報告は2002年度に行われた研究会の活動報告です。2002年度は「価値と世界のあり方」をテーマとし、道徳における実在論と反実在論の対立および、価値に関する言明と自然科学における言明との比較に関する文献を取り扱いました。本報告ではその中でも「価値は世界に実在するのか」について論じている3本の論文を紹介します。価値の実在を巡る問題は、価値と動機付けの関係(道徳的価値はいかにして我々を動機付けるか)についても大きな含意をもつ議論であり、昨年度の内在主義／外在主義の問題と大きく関わります。本報告では両報告間の関係を論じるところまで手が届きませんでしたが、これらは今後のメタ倫理学上の問題を立体的にとらえる上で相互に関連した重要なトピックであると言えるでしょう。

---

[1] *Moral Discourse & Practice*, eds. by Stephen Darwall, Allan Gibbard, Peter Railton, Oxford University Press, 1997. 以後 MDP と略。

[2] 研究報告「メタ倫理学における内在主義と外在主義」、『実践哲学研究』(第 25 号)、実践哲学研究会、2002。

さて、価値がこの世界に実在するのか、という問題はとりわけ20世紀に限定して議論されたものではありません。古くはプラトンのイデア説から価値の実在問題は、価値の主観性と客観性、相対性と普遍性を巡る議論として争われてきたように思われます。しかしこの議論が、20世紀のメタ倫理学での議論として扱われる時、それは単なる非実在＝主観的＝相対的／実在＝客観的＝普遍的といった二分法の組み合わせを離れ、複雑に分類された立場が乱立するに至りました。J・L・マッキーが著書『倫理学』において展開した「反実在論」は先の3者のペアを大きく組み替え、様々なメタ倫理学上の立場を形成する契機となった1理論であったと思われます。マッキーは『倫理学』において、価値とは実在する事物の特性に随伴(supervene)する主観的なものだとし、道徳的な価値が客観的なものとして外的世界の側に実在することを否定しました。そして、我々が日常的に持っている道徳についての実在性、客観性は錯覚であるという錯誤説(error theory)を採用します。マッキーがこのように考える理由の1つとしては、社会や時代の変遷による道徳規範の変動および、共同体内の集団や階級間における道徳的信念の相違を根拠とした「相対性の議論」(argument of relativity)があげられます。彼はさらに「特異性の議論」(argument of queerness)を用いて、価値が客観的かつ実在するものであるという考えにとどめを刺します。「特異性の議論」とは、この世界に存在する自然的な事物と区別され、直観のようなものでしかとらえられないものでありながら、かつ客観的に実在し、行為者の動機にはたらきかけるような実在物というのは奇妙である、という考えです。この形而上学的な存在の奇妙さおよび、その存在に対する認識論上の困難さはそのような実在を疑う十分な理由であるとマッキーは考えていると思われます。

しかし、これに対して、J・マクダウェルは、今回佐々木が紹介する「価値と二次性質」において、価値の二次性質理論をもって反対します。マクダウェルによれば、マッキーが実在するものとしての価値を奇妙な存在と解するのは、マッキ

ーが価値を一次性質的なモデルで考えているからだと言えます。すなわち、我々に経験されるありのままの状態で世界に実在するような事物として価値をとらえている、とマッキーを批判するのです。確かにそのような存在としての価値は奇妙なものであるでしょう。これはマクダウェルも認めます。しかし、マクダウェルは価値は別な仕方で実在すると考えます。すなわち、それ自体は存在者としては実在しない性質でありながら、一般には事物に実在すると考えられている二次性質(色、音、匂いなど)と類比的に考えることによって、価値もまた実在すると言えるのです。マクダウェルはマッキーのロックおよびヒュームの理解に基づいて、マッキーがあらゆる性質を一次性質的に考えていることを示し、その誤りを指摘することによって、自らの議論を説得的にしようとします。

このようなマクダウェルの新しい実在論に対して、S・ブラックバーンはマッキーの投影説を引き継ぐ形で反実在論を展開します。彼の立場は、児玉により報告される「錯誤と価値の現象」において明らかにされています。ブラックバーンは、マッキーと同様に価値の実在性を否定しますが、マッキーの錯誤説のように人々の一見して実在論的な思考を誤りとみなすことはせず、《一見実在論にコミットしているように見える人々の道徳的な思考や発話は、適切な解釈をほどこせば、価値を世界に投影されたものと見る立場(投影説)からでも過不足なく説明し、正当化することができる》という準実在論の立場を取ることによって、反実在論的世界観と、人々の実在論的な道徳的思考との調停を試みます。その一方で、マクダウェルや次いで紹介されるウィギンズの立場を批判し、二次性質とのアナロジーによって道徳的思考を説明することの問題点を指摘しています。

マッキー&ブラックバーン対マクダウェルの論争は、「実在＝客観的＝普遍的」「非実在＝主観的＝相対的」というペアがくずれるのかという点からも眺めることが可能です。マクダウェルは二次性質とのアナロジーに訴え、実在と客観性、非実在と主観性の結びつきにグラデーションを持ち込むことによって、これら3

者の結びつきを緩和し、「主観的ではあるが、実在するもの」として価値を提示しました。これに対して、最後に奥田が紹介するD・ウィギンズの「感受的主観主義？」 は主観性と相対性の関係を見直すことによって、先の3者の組み合わせを再考する立場であるとみることができるでしょう。ウィギンズの考えでは、情動主義を代表とする従来の主観主義には、価値の概念が感情と不可分の関係にあるというすぐれた洞察がある一方で、評価の不一致を不十分にしか説明できないという欠点があります。そこで彼は主観主義を洗練させることによりこの欠点を克服しようとします。ウィギンズは、価値判断の情動的側面と不可分なものとして認知的側面を取り扱うべきだと考えます。彼は、価値判断の正しさの基準を判断者に求めるヒューム的主観主義を退け、「主体の反応」とのペアでのみ可能となる「対象の属性」が存在することを認め、それを正しく捉えることが正しい価値判断の基準だと主張する感受的主観主義を提唱しています。

これらの報告は、研究会における相互の読み合わせおよび、メーリングリスト上での討議によって作成されました。よって、解釈および成果を報告者以外の研究会メンバー、すなわち神崎宣次、島内明文、鶴田尚美、林芳紀、森芳周、山本圭一郎(以上50音順)におっています。

最後に、本テーマにおける重要参考文献の一覧を紹介します。本来ならば今回紹介しました文献内容をこれらの文献の内容とつきあわせ、さらなる理解の深化が求められるところですが、ひとまずは研究の経過報告という形で本報告を発表させていただきたいと思います。研究会もまだまだ基本文献の収集と読解と言う段階で、本報告も研究不足の感がありますが、今後の議論の布石としてここにとりあえずの成果を発表する次第です。この報告がわが国でのメタ倫理学に関する議論の活性化にいくらかでも貢献できれば幸いです。

内容

1. ジョン・マクダウェル「価値と二次性質」……..佐々木拓
2. サイモン・ブラックバーン「錯誤と価値の現象」……..児玉聡
3. デイヴィッド・ウィギンズ「感受的主観主義?」……..……..奥田太郎

文献リスト

Blackburn, S. (1993). *Quasi-realism*, Oxford University Press.

Mackie, J. (1977). *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Penguin Books.

邦訳『倫理学　道徳を創造する』、加藤尚武監訳、哲書房、1990年

McDowell, J. (1998). *Mind, Value, Reality*, Harvard University Press.

Nagal, T. (1979). *Mortal Questions*, Cambridge University Press.

邦訳『コウモリであるとはどのようなことか』、永井均訳、勁草書房、1989年

Putnam, H. (1981). *Reason, Truth and History*, Cambridge University Press.

邦訳『理性・真理・歴史—内在的実在論の展開　叢書ウニベルシタス』、野本和幸、三上勝生、中川大、金子洋之訳、法政大学出版局、1994年

Wiggins, D. (1987). *Needs, Values, Truth*, Oxford University Press.